



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第16主日 B年(2024年7月21日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 23章1—6節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 2章13—18節

福音朗読：マルコによる福音書 6章30—34節

共苦、共感

弟子たちが、使徒として宣教へと派遣されたのは「悔い改めさせるため」でした(6章12節)。悔い改めは神の国と関連します。イエスさまのガリラヤでの宣教の言葉「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(1章15節)とあるからです。

イエスさまがもたらしてくださる神の国に、生きる姿勢を合わせていく。それが悔い改めることの意味です。ですから、イエスさまから派遣された使徒たちも神の国だけを信頼して、何も持たずに、何にも頼らずに出かけて行かなければならなかったのです(6章8—11節)。

今日の福音朗読の冒頭では、その使徒たちがイエスのもとに戻って来て、自分たちの行動を報告します。そこには送り出す(遣わす)イエスと、送り出された(遣わされた)使徒たちとの信頼関係を見ることができます。

続く31節に「しばらく休むがよい」とあります。「休む」はギリシア語でアナパウオーです。これは「体を休息させる」という意味に加えて「真実や喜び、慰めを受けて、元気づけられる」という意味もあります(例：2コリ7章13節)。

イエスさまは人里離れたところに使徒たちを連れて行って、彼らに身体的にも精神的(霊的)にも休息をあたえながら、人々の願いに応えるための力を神から受けるために「元気づける」という意図を持っていたのでしょうか。事実、イエスさまご自身も人里離れたところで一人で祈ることはありました(1章35節参照)。

しかし、舟ふねに乗って、自分たちだけで人里離れた所いどうへと移動しようとする様子を、群衆ぐんしゅうは「見て」、「気づき」、「駆けつけ」ます。イエスを探し求める人びとの熱望ねつぼうが伝わります。

今度は、そんな群衆の様子をイエスが「見て」、「憐れあわ」に思い、「教え始め」ました。「飼い主かぬしのいない羊あのような有り様さま」とありますが、羊は弱い動物で、群れから離れて単独たんどくでは生きていけません。羊飼いは群れを一つにまとめ、敵から守り、草のある場所へと導きます。この表現もちを用いながら、イスラエルの宗教的な指導者がいない状態えがを描いていると思います。

「深く憐れみ」は、ギリシア語はスプラクニゾウマイですが、これは「はらわた」スプラクノンから派生はせいした動詞です。新約聖書のなかで十二回使われています。「目の前の人の苦しみを見たときに、こちらのはらわたが痛くなるほど、その人の苦しみがわかる」という意味です。共感きかんといってよいでしょう。

説教：共苦、共感

「[イエスは] 大勢おおぜいの群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ」(マコ6章34節)。哀しみかなにくれる人間の姿と、イエスさまと弟子たちが見た大勢の群衆の姿が、わたしには重かさなって見えます。哀しみの中で、悲嘆ひたんに暮れる人々の姿を「飼い主のいない羊」から想像そうします。憂うれいや、嘆なげきに苛さいまれ、切なささいなとやるせなさで心がいっぱいになっているような人々の様子です。彼らは待ち続けていました。自分たちの哀しさに対して共感している人を。「深く憐れみ」は、イエスさまが相手しめに示す共感を表しています。哀しむ人々の様子を見て、自分も痛くなるくらい哀しまれる。こうして、イエスさまは共感します。共感どころか、「共苦」と言ってもよいかもしれません。

